



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	移民現象の地理学研究における「前適応」概念の適用
Author(s)	矢ヶ崎, 典隆
Citation	東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学, 55: 49-53
Issue Date	2004-01-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2794">http://hdl.handle.net/2309/2794</a>
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

## 移民現象の地理学研究における「前適応」概念の適用\*

矢ヶ崎 典 隆

地 理 学\*\*

(2003年 8 月29日受理)

### 1. はじめに

近年、移民に関する学術研究に関心が高まっており、さまざまな分野において研究業績が蓄積されつつある。学際的な学術団体として1992年に組織された日本移民学会は、『移民研究年報』を通じて多様な研究成果を公表している。地理学においても、移民に関する関心は高まっている<sup>1)</sup>。2002年7月に和歌山市で開催された歴史地理学会大会では、シンポジウム「移民・植民の歴史地理」が行われた。研究発表と活発な議論から、日系移民に関して多様な地理学的研究が蓄積されてきたことが明らかになったし、今後の発展の可能性が認識された<sup>2)</sup>。

世界各地における移民現象と移民社会に関して、詳細な事例研究を蓄積することは地理学にとって重要な課題である。同時に、各地に形成された移民社会を比較研究するための考察の枠組みも必要になる。地理学では従来から移民現象の記述に主な関心が注がれてきたが、モデルを提示することによって移民現象を説明することが移民研究の発展には必要である。

このような問題意識に基づいて、本稿ではアメリカ合衆国の文化地理学者であるテリー・ジョーダンが提唱した「前適応」概念を紹介し、日系移民の地理学的研究に前適応概念を適用できることを提示するとともに、新しい日系移民研究の可能性を示唆することを目的とする。

### 2. ジョーダンの「前適応」概念

テリー・ジョーダンはアメリカ合衆国を代表する歴史地理学・文化地理学の研究者である。スミスは、アメリカ地理学者協会に設置された文化地理学専門グループの会員に対して文化地理学の認識に関する質問表調査を行った。そのなかで、アメリカ合衆国を代表する存命の地理学研究者として、ウィルバー・ゼリンスキー、ピアス・ルイス、ドナルド・マイニグ、イーファー・トゥアン、デニス・コスグロブに次いで、ジョーダンは第6位にランクされた<sup>3)</sup>。

ジョーダンは北アメリカにおけるヨーロッパ系移民の植民や文化を中心的な課題として、精力的に研究成果を発表してきた。初期の研究としてはテキサスにおけるドイツ系農民の研究がある<sup>4)</sup>。さらに、テキサスの墓地やアメリカの丸太小屋に関して歴史・文化地理学の研究を展開した<sup>5)</sup>。さらに最近では、アメリカ東部の森林地帯の開拓や、アメリカ西部の放牧業の形成について論じた<sup>6)</sup>。とくに、『北アメリカの放牧フロンティア』は、多様な牧畜形態と自然環境に関する緻密な分析を、旧大陸から西インド諸島を経由してアメリカ西部に到達するという、地域的・歴史的な枠組みにうまく組み込んで展開した壮大な研究であると評価される<sup>7)</sup>。

ジョーダンは、1989年に行ったアメリカ地理学者協会の会長講演「北アメリカ農村部における前適応とヨーロッパ移民の植民」において、ヨーロッパ移民の植民活動に関する従来の研究を展望するとともに、前適応の概念を導入することによって、記述的な研究から

\* Application of "Preadaptation" in the Study of Asian Immigrants and Their Communities in the United States / Noritaka YAGASAKI

\*\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

論理的説明の可能な研究へという研究の発展が期待できると議論した<sup>8)</sup>。ジョーダンの議論を要約すると以下ようになる。

ヨーロッパ人の北アメリカへの移住と植民は、北アメリカの歴史地理学・文化地理学の研究者にとって重要な研究課題であり、多数の研究が蓄積されてきたが、7つの記述的な課題を認めることができる。それらは、地域に関する研究、伝播に関する研究、景観に関する研究、成功した最初の集落に関する研究、ヨーロッパ文化の単純化に関する研究、環境知覚に関する研究、そして地表の改変者としての人間に関する研究である。

このような研究の蓄積によって、北アメリカの農村部においてヨーロッパ人が経験したことを知ることができるようになった。しかし、これらの研究は記述的であるため、何故そのような事象が起きたのか、また何故そのような文化が展開したのかについて、説明してくれるものではない。例えば、地域に関する研究は、地理的空間と特定の文化要素の相関を示すものでしかない。文化を説明する際の伝播の役割は過大に評価されてきた。文化的遺物としての景観を観察することによって特定の文化が移動したことを理解できるが、景観から移動を説明できるわけではない。ヨーロッパ文化の単純化、成功した最初の集落、環境の改変についても、ヨーロッパ人による植民活動が行われた地域で実際に起きた現象は明らかになっても、その理由まで説明されるものではない。地理的現象を説明するためには、モデルや概念を因果関係のメカニズムに関連付ける必要がある。もっとも、ヨーロッパ人の植民や集落を研究した研究者のなかには、因果関係を説明するモデルを提示した人々もいたが、彼らは環境決定論、経済決定論、文化決定論に陥った。

海外におけるヨーロッパ人の植民を研究するために、文化生態学概念、とくに適応概念を導入することが有効である。文化生態学では文化を適応システムとして理解する。文化とは、自然や環境の変化に対して長期的な適応を可能にする、非遺伝的なものである。すなわち、アメリカに移植されたヨーロッパ文化は植民活動を行う際の適応戦略となり、それが新しい土地で利用可能かどうかを実験された。

前適応 (preadaptation) の概念とは、人間社会が移住に先だって所有する特性の複合体であり、それが新しい環境のもとで植民活動にあたる際に競争力となる。言い換えれば、特定の環境において植民に従事するために、あるヨーロッパの地域の文化はほかの地域の文化よりも、より前適応していた。ヨーロッパから導入

された文化が北アメリカで存続する確率は、前適応の水準と連動していた。

北アメリカにおけるヨーロッパ移民の歴史地理学・文化地理学は7つの記述的な概念にまとめられることが指摘されたが、それらに前適応概念を適用すれば説明力が増大する。ヨーロッパ文化の単純化と伝播は、植民地域において不適応なヨーロッパ的文化特性を排除するプロセスであり、前適応していた有利な特性が存続するプロセスにほかならない。アメリカに根を下ろしたものと消滅したものを見れば、適応の実態がわかる。単純化は植民地で発生し、適応する必要があったことがその根本的な理由であった。成功した最初の集落というのは、新しい環境への適応に成功したためである。後からやってきた人々は最初の成功例を見習った。文化景観は前適応の能力を持ったヨーロッパ的特質から構成されている。丸太小屋やペンシルヴェニアのドイツ系納屋がその例である。文化地域は、住民の適応力をまさに証明するものである。人間による環境の改変は、適応戦略が成功した結果である。環境知覚は、以前の適応によって特徴付けられたものである。

前適応の成功例をあげてみよう。ヨーロッパの出身地と環境が類似した場所を選んで入植することによって前適応した定住が成功する事例がみられた。グレートプレーンズに入植したロシア系ドイツ人や北部森林地帯に入植したフィンランド人は、文化と道具をそっくりそのままアメリカに導入し、わずかな修正をほどこすだけで利用することができた。また、ゲルマン系を中心としたヨーロッパで利用されていた作物や家畜はすべてアメリカの環境でうまく行き、農業国家としてのアメリカが形成される基盤となった。

また、大西洋岸の中部植民地で発生し、アメリカ東部の森林地帯に広がった森林開拓文化の起源について研究した結果、1640年代からニュースウェーデンのデラウェアバレー植民地にやってきた農村出身のフィンランド人が前適応した森林開拓の方式を導入したことがわかった。この森林開拓方式は、先住民の文化をとり入れることにより、森林開拓文化の原型となった。こうして、1660年までにはデラウェア川の下流部に最初の成功した集落が形成された。後からやってきた多数のスコットランド系北アイルランド人がこの森林開拓方式を採用することによって、森林の開拓が飛躍的に進んだ。また、イベリア半島で行われていた低地と高地という二つの牧畜文化の伝統が、イベリア半島におけるそれぞれの生態的ニッチから南北アメリカにおける類似の環境のもとに導入され成功した。これらの牧畜文化を導入したスペイン人は前適応していたわけ

である。

一方、前適応していなかったために開拓に失敗した人々もいた。南カリフォルニアのアナハイムに入植したドイツ人や、ユタに入植したスカンジナビア系のモルモン教徒がそうした例である。前適応していなかったために、このような集団はより好ましい生態学的適応戦略を採用することになった。

### 3. 移民社会とホスト社会の考察

以上のようにジョーダンでは、ヨーロッパ移民が北アメリカの自然環境のもとで植民に従事するという枠組みにおいて前適応の概念を使用した。すなわち、ヨーロッパ移民が持ち込んだヨーロッパ文化の中には、新しい自然環境で植民にあたる際に適応戦略として有効

なものとしてないものがあった。同じ移民集団が異なった自然環境のもとで植民を行ったとすると、ある自然環境には前適応できていたために植民に成功し、他の自然環境には前適応できていなかったために植民に失敗した場合があった。また、異なった移民集団が同じ自然環境に入植した際に、ある集団は前適応できていたために植民に成功し、他の集団は前適応できていなかったために植民に失敗した場合があった。すなわち、ある地域の自然環境のもとで植民活動を行う場合に、ヨーロッパ移民が本国から持ちこんだ文化が適応戦略として有効に機能するかどうかが問題となるわけである。もちろん、北アメリカには先住民が住んでいたが、ヨーロッパ移民と先住民との接触の当然の帰結として、病気が大流行し、先住民人口は大幅に減少していた。先住民がほとんど抹殺されてしまったあと

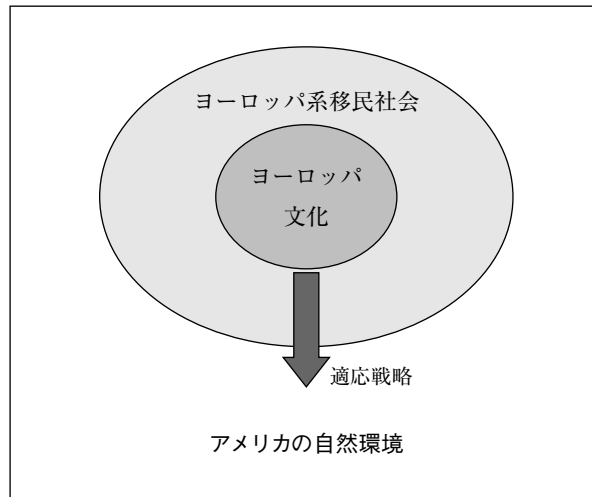
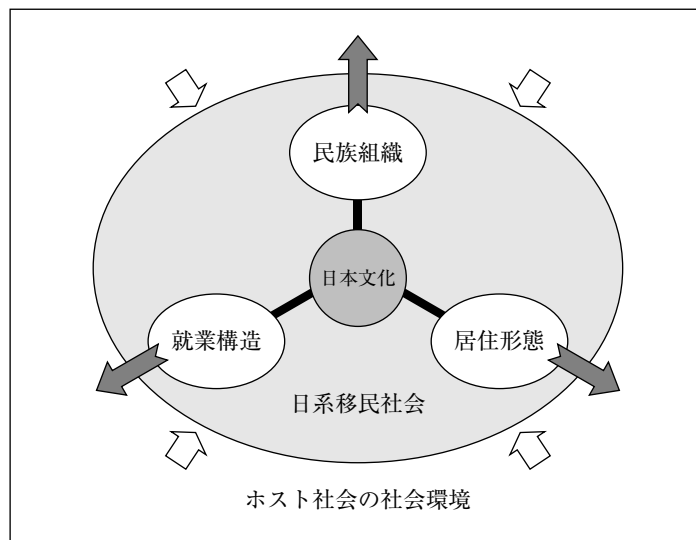


図1 アメリカの自然環境とヨーロッパ系移民



↑ ホスト社会からの圧力      → 適応戦略による対応

図2 アメリカ・ホスト社会の社会環境と日系移民社会

の、より原始的な環境に近い条件のもとで、ヨーロッパ移民による植民が行われたわけである<sup>9)</sup>。つまり、ジョーダン、ヨーロッパ文化と北アメリカの自然環境という枠組みで前適応概念の有効性を論じた。以上のようなジョーダンの議論を模式化すると図1のようになる。

ジョーダンが提唱する前適応の概念は、アジア系移民、南・東ヨーロッパ系移民、そしてラテンアメリカ系移民などのように、19世紀後半以降に流入した新移民がアメリカ社会に適應するプロセスを説明するために適用できると考えられる。彼らは先着のヨーロッパ系移民とその子孫によって形成されていたアメリカのホスト社会において、居住空間を確保し、生存のための経済基盤を確立しなければならない。すなわち、アメリカの自然環境をホスト社会に置き換えることによって、新着の移民集団がホスト社会に適應するプロセスを検討するために前適応の概念を適用できるわけである。

19世紀末からカリフォルニアに流入した日系移民は、日米戦争の勃発までには、ホスト社会から制度的圧力や非制度的圧力を受けながらも、とくに集約的農業において成功をおさめていた<sup>10)</sup>。彼らは生活空間と経済基盤を確立するためにさまざまな適應戦略を用いたが、それらは民族組織、就業構造、居住形態に分類される<sup>11)</sup>。そうした適應戦略の基盤となったのは日本から持ちこまれた文化であった。農業生産者によって構成された産業組合、花卉や蔬菜類の集約的栽培、非制度的な金融組織としての頼母子講などは、日系移民社会の発展を促した適應戦略の例であり、それらは日本から導入された文化を基盤としていた。もっとも、ローカルホスト社会の状況を反映して、また、より広域なホスト社会の特徴を反映して、適應戦略の選択・適用と移民社会の特徴は地域によって異なっていた<sup>12)</sup>。日本から持ちこまれた文化が適應戦略として有効に機能するかどうかは、ホスト社会の特徴によって異なっていた(図2)。

新移民がアメリカ社会に適應する過程を研究することは、ジョーダンが提示した自然環境とヨーロッパ移民の研究よりも複雑である。ホスト社会はそれぞれの移民集団に対して一様ではない圧力を加える。すなわち、ホスト社会の社会環境はそれぞれの移民集団にとって均一ではない。したがって、それぞれの移民集団に対してどのような社会環境が形成されたのかという、ホスト社会の動向を詳細に検討する必要がある。

筆者は別稿において、海外の日系社会の地理学的研究に関して、3つの研究テーマがあると指摘した。そ

れらは、ホスト社会の枠組みの中で移民社会を検討すること、同一のホスト社会に流入した複数の移民集団の比較研究、そして、経済的(就業的)すみわけと就業の占拠系列である<sup>13)</sup>。それぞれのテーマに関して事例研究を蓄積する必要があるが、前適応の概念を適用することによって、ホスト社会における移民集団の適應戦略を明らかにし、移民現象を説明することができるとともに、比較研究のための枠組みを提示することができる。こうした研究方法を用いた事例研究に関しては別稿であらためて提示するつもりである。

付記：本稿の作成にあたり、科学研究費補助金(基盤研究B(2)「移民の適應戦略と前適応からみた移民社会・ホスト社会の地域生態学的比較研究」(代表者：矢ヶ崎典隆)の一部を使用した。

### 引用文献

- 1) 杉浦 直：アメリカ合衆国における日系移民集団の地理学的研究—その成果と課題—, 移民史研究年報 7:115-133, 2001年。
- 2) 杉浦 直・平井松午：移民・植民の歴史地理, 歴史地理学 45(1):1-2, 2003年。
- 3) Smith, J. S.: Cultural geography: A survey of perceptions held by Cultural Geography Specialty Group members, *The Professional Geographers* 55(1):18-30, 2003. なお, ジョーダン教授は2003年10月16日に65歳で逝去された。
- 4) Jordan, T. G.: *German Seed in Texas Soil: Immigrant Farmers in Nineteenth-century Texas*. Austin: University of Texas Press, 1966.
- 5) Jordan, T. G.: *Texas Graveyards: A Cultural Legacy*. Austin: University of Texas Press, 1982. Jordan, T. G.: *American Log Buildings: An Old World Heritage*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1985.
- 6) Jordan, T. G. and M. Kaups: *The American Backwoods Frontier: An Ethnic and Ecological Interpretation*. Johns Hopkins University Press, 1989. Jordan, T. G.: *North American Cattle Ranching Frontiers: Origins, Diffusion, and Differentiation*. Albuquerque: University of new Mexico Press, 1993.
- 7) 矢ヶ崎典隆: Terry G. Jordan 著: *North American Cattle Ranching Frontiers: Origins, Diffusion, and Differentiation*, 歴史地理学 38(4):50-52, 1996年。
- 8) Jordan, T. G.: Preadaptation and European colonization in rural North America. *Annals of the Association of American Geographers* 79(4):489-500, 1989.
- 9) Denevan, W. M.: *The Native Population of the Americas in 1492*. Madison: University of Wisconsin Press, 1992.
- 10) 矢ヶ崎典隆: 『移民農業—カリフォルニアの日本人移民社会—』古今書院, 1993年。
- 11) 矢ヶ崎典隆: カリフォルニアにおける日系移民の適

応戦略と居住空間. 歴史地理学 45 ( 1 ) : 57-71, 2003年.

- 12) Yagasaki, N. : Ethnic agricultural cooperatives as adaptive strategies : Diffusion, development and adaptation in contextual perspective, *Geographical Review of Japan* 68B : 119-136, 1995. Yagasaki, N. : Spatial organization of Japanese immigrant communities : Spontaneous settlements and planned colonies in the northern San Joaquin Valley, California. *The Japanese Journal of American Studies* 13 : 45-62, 2002.
- 13) Yagasaki, N. : Adaptive strategy of Japanese immigrants and occupational sequent occupance in the development of fresh produce marketing in Los Angeles. *Geographical Review of Japan* 76 : 894-909, 2003.